

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 金 田 晋

金田晋氏の博士学位申請論文『形象と価値の現象学——フッセルの美学思想を弾機として——』は、現象学の創始者であるドイツの哲学者エドムント・フッセルの美学思想を、その断片的テキストから再構成し、その発展の可能性を試みた研究である。20世紀の西洋美学における現象学の貢献は顕著なものがあったが、それは、初期現象学のガイガーやオーデブレヒト、インガルデンやハイデガー、更にはフランスのサルトル、デュフレンヌ、メルロ＝ポンティらの著作によるものであって、フッセル自身の美学思想が語られることはなかった。この偏りは、フッセルの美学に関連する原稿が長らく公表されなかったという事情によるとともに、フッセルの美学関連のテキストが体系性を欠いた短いものであり、多くの著作に断片的に散見する洞察を渉猟したうえで解釈することを必要とすることも与っていた。本論文は、長年にわたってこの課題に取り組んできた金田氏の、その研鑽の結晶である。

論文は現象学の本質を論ずる序章に続けて、第1部原理篇全8章、第2部展開篇全3章の全12章よりなっている。原理篇はフッセルの美学思想の再構成を目指す。そこに収録された研究の主題は、フッセル自身のテキストの解釈と初期現象学における美学的研究の状況など歴史的原点に関するもの(第1～2章)、想像力を含む感性の問題(第3章、第6～8章)、価値の問題(第4～5章)だが、これらが相互に深く関連しあっていることは言うまでもない。その核心を敢えて数行に要約するならば、次のように言えよう。金田氏によれば、現象学の本質は、志向性を本質とする意識が、与えられた具体的で個的な、言い換えればいきいきとした対象のなかに、理念的本質を捉え構成してゆくところにある。この生きた具体性と理念的本質との緊張に立脚する現象学の特質は、美学思想においては、まず、対象の現出の仕方に対する「関心」の美学という主張として現れるが、この「関心」は身体(特に「キネステーゼ感覚」)を介しての空間の能動的な構成と相関する。この特徴は、現象学的美学の特権的テーマである想像力の諸契機にわたる分析においても強調される。すなわち、重視されるのは空想ではなく画像のような物質的基盤をもつ像に関わる想像で(「像意識」)、これに対応して、美的対象を成す諸層のなかでも物質的な具体性(「像客体」)の意義が論じられる。更に金田氏は、フッセルの美学のもう一つの中核をなす価値の問題についてもまた、知覚と平行してなされる価値構成が、先験的な規範意識のようなものではなく、志向的意識による今ここの具体的な体験であることを強調している。

展開篇の3篇は、中動相、像の具体性、隠喩を主題とし、金田氏の独自の現象学的思索を展開している。特にその第1篇は、動詞の「中動相」のあり方に現象学の本質を見つ、それに対応する藝術のあり方(2人称、表出、現在、身体、想像力)を論じたもので、氏の現象学の全体を描出するという意味を認めることができる。

形式的な不備(結論的総論及び参照文献表の欠)や、やや説明に明晰さを欠く点が見られるものの、独自のテーマを設定し、徹底した哲学的検証を試みた本論文は、博士(文学)の学位に値する。本審査委員会はそのように判定する。